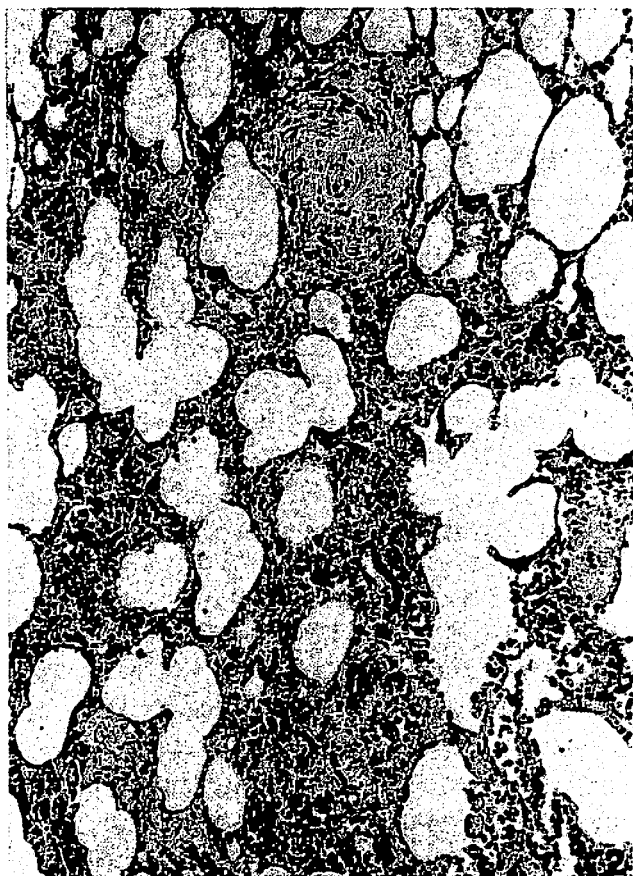


馬の肺

競走馬総合研究所病理研究室出題 第24回獣医病理学研修会標本No.408



動物：ウマ(サラブレッド種)，雄，鹿毛，5歳5ヵ月齢(昭和53年生)，アメリカ産。

臨床的事項：昭和55年9月26日，日本中央競馬会栗東トレーニングセンター(滋賀県)に競走馬として入厩し昭和58年7月10日迄レースに出走していた。

該馬は昭和58年7月29日札幌から滋賀県への輸送直後に発熱(輸送熱，40.5℃)，肺胞音粗朧，呼吸速拍，胸水増量，及び四肢浮腫などを認め，種々加療(補液，抗生物質，副腎皮質ホルモン製剤，整腸剤，強心剤，強肝剤など)を試みたが良化することなく同年9月13日斃死した。

栗東トレーニングセンターで病理解剖の結果，化膿性胸膜炎並びに肺炎と診断され，肺のみが送付されてきた。

肺の固定後の肉眼所見：肺胸膜は失沢しやや肥厚，一部に出血或いは線維性絨毛の増生。肺断面は淡橙乃至暗橙色を呈し全葉性に弾力性をやや欠き水面直下に沈下。間質は軽度水腫乃至結合組織の増生による増幅。左右の肺動脈は分岐部及びその分枝において内膜面の粗穢化並びに肥厚，及び血栓形成。肺動脈内血栓の横断面は層状構造を示す器質化した血栓で，直径約2.0cmから3mmに至る動脈に観察された。副葉においては，器質化した血栓領域において膿瘍形成がみられた。

肺の組織学的所見：後葉動脈内には血栓が多発して観察された(写真1, HE, ×33)。血栓は完全に血管腔を閉鎖，

或いは血栓内に新しい管腔を形成したいわゆる再疎通化像がみられた。一部の血栓は靱状を示していた。血栓形成領域或いはその周囲の肺動脈壁は，著しい中膜の水腫性粗穢化乃至石灰化を呈し弾性線維の膨化・断裂・消失からなる中膜変化を示していた。その部の内膜は著しい壁の粗穢化・肥厚を示していた。一方，血栓形成の支配下領域の肺胞壁は，膠原線維並びに弾性線維の増生，毛細血管の充盈或いは水腫性肥厚を示し，一部にヘモジデリン沈着を伴っていた。小動脈の腔は時折著しく狭小化し，外膜に線維性結合組織の顕著な増生もみられた(写真2, HE, ×110)。肺胞腔内には，水腫液と共に肺胞大食細胞，好中球，リンパ球並びにヘモジデリンを貪食した心臓弁膜細胞等がみられた。

考察：競走馬において輸送後発熱(輸送熱)を呈し，呼吸器疾患を併発して斃死する症例が時折ある。

今回の輸送性肺炎で斃死した1症例の肺についての病理学的所見は主病変として多発性血栓形成，肺胞壁の水腫性硬化(肺の線維化)並びにヘモジデリン沈着を示したことから血栓に起因した栓塞性の肺炎と診断した。

一方，肺動脈血栓形成の素因として動脈壁の中膜変性が考えられた。

診断：肺血栓塞栓症による肺線維化並びにヘモジデリン沈着。